

ピエトロ・ポンポナッツィ『魂の不死性について』 試訳（第4章まで）

石田 隆太・高石 憲明

凡例

底本：

Pietro Pomponazzi, *Traité de l'immortalité de l'âme / Tractatus de immortalitate animæ*. Texte établi, traduit, présenté et annoté par Thierry Gontier, Paris: Les Belles Lettres, 2012. (※ラテン語原文とフランス語の対訳)

参照した翻訳：

“Pietro Pomponazzi,” translated by William Henry Hay II, revised by John Herman Randall, Jr., annotated by Paul Oskar Kristeller, in Ernst Cassirer, Paul Oskar Kristeller, John Herman Randall, Jr. (eds.), *The Renaissance Philosophy of Man*, Chicago: The University of Chicago Press, 1948, 257–381. (※英語訳)

Petrus Pomponatius, *Tractatus de immortalitate animæ*, a cura di Gianfranco Morra, Bologna: Nanni & Fiammenghi, 1954. (※ラテン語原文とイタリア語の対訳)

Pietro Pomponazzi, *Abhandlung über die Unsterblichkeit der Seele*, übersetzt und mit einer Einleitung herausgegeben von Burkhard Mojsisch, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1990. (※ラテン語原文とドイツ語の対訳)

Pietro Pomponazzi, *Trattato sull'immortalità dell'anima*, a cura di Vittoria Perrone Compagni, Firenze: Leo S. Olschki, 1999. (※イタリア語訳)

Pietro Pomponazzi, *Tratado sobre la inmortalidad del alma*. Estudio preliminar, traducción y notas de José Manuel García Valverde, Madrid: Tecnos, 2010. (※スペイン語訳)

Pietro Pomponazzi, “Tractatus de immortalitate animæ / Trattato sull'immortalità dell'anima,” in *Tutti i trattati peripatetici*. Monografia introduttiva, testo critico e note di Francesco Paolo Raimondi e di José Manuel García Valverde, traduzione di Francesco Paolo Raimondi, Milano: Bompiani, 2013, 923–1105. (※ラテン語原文とイタリア語の対訳)

伊藤和行, 「ピエトロ・ポンポナッツィ」, 根占献一, 伊藤博明, 伊藤和行, 加藤守通, 『イタリア・ルネサンスの靈魂論 [新装版]』, 三元社, 2013, 127–79. (※日本語の部分訳を所収)

- ・訳文中の [] は訳者による補いである。
- ・段落番号は底本のものを採用した。

はじめに

本稿は、15世紀後半から16世紀前半にかけて活躍したイタリアの哲学者ピエトロ・ポンポナッツィ（1462–1525）による『魂の不死性について』の冒頭から第4章までの試訳

である。魂の不死性をめぐる彼の議論をどう評価するのは今日でも問題であり続けているが、この著作が哲学史的に重要であることは論を俟たない¹。その理由を取って一言でいうなら、魂の不滅が単なる理性にもとづいては証明できないという立場をはっきりと示したことにある。イタリア・ルネサンス思想研究の大家パウル・オスカー・クリステラーは次のように言っている。

ボンポナッツィがまさに言ったこと、また彼以前や以後に多くの尊敬すべき思想家たちが言ったことは、ある理論——たとえば靈魂不滅の理論——は信仰にしたがえば真理であるが、単なる理性にもとづいては論証されえないということであり、またその理論の反対が同様に強い、あるいはいっそう強くさえある本当らしい論拠によって、支持されるように思われるであろうということである²。

後でクリステラーがより具体的に述べているように、魂の不滅が理性的には論証できないという一般的な見解は、ドゥンス・スコトゥス (c.1266–1308) やカイェタヌス (1469–1534) によっても主張された。したがって、ボンポナッツィの立場をより判明な仕方を知るためには彼の議論の全貌を見通すことが不可欠であり、そのための手段として『魂の不死性について』の全訳を試みることにした。われわれはすでにトマス・アクィナス (c.1225–1274) によるアリストテレスの『魂について』に対する注解の翻訳にも従事しているため⁴、ヨーロッパの中世から近世にかけてのアリストテレス魂論の系譜をより細かく見る可能性を提供することもできる。本稿はそうしたことすべてのために必要な基礎的作業の一部である。

凡例に掲げたように底本としては、ティエリー・ゴンティエによる羅仏対訳の翻訳書を用いた。ゴンティエが提示するラテン語の原文は 1516 年に公刊された初版本(ポローニャ版)を基礎としているが、1525 年に出版された再版本(ヴェネツィア版)との異同も注記されている。さらには、ジョヴァンニ・ジェンティーレ⁵、ジャンフランコ・モッラ、ブルクハルト・モイジッシュ⁶による校訂も参照しているため、現時点でもっとも有用な校訂を行っていると判断した。なお本稿では、ゴンティエが用いている段落番号も便宜のために併記することにした。ポローニャ版やヴェネツィア版ではそもそも章を区別する以外にはこうした段落分けがないことも付記しておく。

¹ 今年になって筑摩書房から全 8 巻で出版された『世界哲学史』というシリーズにおいても、ボンポナッツィが主題的に取りあげられていることは見逃せない: アダム・タカハシ, 「近世スコラ哲学」, 伊藤邦武, 山内志朗, 中島隆博, 納富信留=編, 『世界哲学史 5』, 筑摩書房, 2020, 97–126.

² P. O. クリステラー, 『イタリア・ルネサンスの哲学者』, 佐藤三夫=監訳, 根占献一, 伊藤博明, 伊藤和行=共訳, みすず書房, 2006 (新装版), 128.

³ クリステラー, 『イタリア・ルネサンスの哲学者』, 130.

⁴ 石田隆太, 高石憲明, 「トマス・アクィナス『魂について』註解」第三卷第一章 試訳, 『古典古代学』, 第 11 号, 2019, 1–25; 「トマス・アクィナス『魂について』註解」第三卷第二章 試訳, 『倫理学』, 第 35 号, 2019, 159–72; 「トマス・アクィナス『魂について』註解」第三卷第三章~第四章 試訳, 『哲学・思想論集』, 第 45 号, 2020, 205–28; 「トマス・アクィナス『魂について』註解」第三卷第五章 試訳, 『倫理学』, 第 36 号, 2020, 127–41.

⁵ Pietro Pomponazzi, *De immortalitate animae*, a cura di Giovanni Gentile, Messina: Edizioni Principato, 1925.

⁶ モッラとモイジッシュのものは凡例に記載されている。

次に、本稿で訳出した第4章までの内容についてその概要を示すことにしよう。冒頭にヴェネツィアの有力な貴族に対する献辞を掲げ、さらに序文として著作を執筆するにいたった経緯などを述べた後に、ボンポナッツィは第1章において以降の考察すべての前提となることを示している。それは、本性的に人間は死すべきものと不死のものの中間にいるどっちつかずの存在者だということである。これを人間本性の多重性と捉えたうえで、彼は第2章ではさらに六通りの捉え方を提示する。

- ・人間において死すべき本性と不死の本性が別々に定められる場合
 - ①死すべき本性も不死の本性も人間の数に応じて多数化している。
 - ②不死の本性は単一だが、死すべき本性は多数化している。
 - ③不死の本性は多数化しているが、死すべき本性は単一である。
- ・人間において死すべきでも不死でもある同一の本性が定められる場合
 - ④人間本性は端的には不死だが、或る点に即しては死すべきである。
 - ⑤人間本性は端的には死すべきだが、或る点に即しては不死である。
 - ⑥人間本性は或る点に即しては死すべきだが、或る点に即しては不死である。

第3章以降に目を向けるなら、まず③と⑥は論理的な可能性として示されるものの実際にはありえない立場とされる（第3章）。そのうえで、①はプラトン主義者（第5章と第6章）、②はテミスティオスとアヴェロエス（第3章と第4章）、④はトマス・アクィナス（第7章と第8章）に帰される。そして最終的には、⑤がボンポナッツィの同意する見解として『魂の不死性について』の後半部分で詳述されることになる（第9章から第14章）。

かくして、魂の不滅をめぐる錯綜した議論は第3章から本格化する。第3章の後半は②の要約を示す箇所であり、アヴェロエスおよびテミスティオスの見解がまずは簡潔に示される。それは主として二つの要素からなる。一つは、知性認識する魂と可滅的な魂が実在的に区別されているということである。もう一つは、あらゆる人間のもとで、知性認識する魂は単一であるのに対して、死すべき魂は多数化しているということである。前者の実在的な区別については、ボンポナッツィによれば、可能知性は不死だが栄養摂取する魂や感覚する魂は死すべきだということを大前提にすると、同一のものが不死かつ死すべきであることは端的には不可能なので、彼らは不死の魂と死すべき魂を実在的に区別するに至った。後者については、知性の単一性の根拠となるアリストテレス的なテーゼが示されるのみである。そのテーゼとは「同じ種における諸個体の多数化は量をもつ質料によってのみ可能である」のことであり、スコラ学では「個体化の原理は質料である」という定式として知られているものでもある。

第4章におけるアヴェロエス的な見解の論駁は少し込み入った論述であるので、ここでは簡単なあらすじを示すだけにしよう。まずボンポナッツィによればアヴェロエス的な見解は、偽であるのみならず、アリストテレスとは無縁である（23）。前者の偽であることについては、トマスの著作を参照するように促される（24）。そのうえで以降では、アヴェロエス的な見解がアリストテレスとは無縁であることの論証を行うことが宣言される（25）。ボンポナッツィによる主要な論駁は三通りある。第一に、知性は身体に完全に依存しない作用を全くもたないことが示される（26-27）。これをめぐっては、アヴェロエ

ス側の反論 (28)、ポンポナッツィの再反論 (29)、アヴェロエス側の再反論 (30-32)、ポンポナッツィの再々反論 (33-36) という応酬が繰り広げられる。第二に、知性認識するためには表象像を觀照しなければならないことが取りあげられる (37)。これをめぐっては、アヴェロエス側の反論 (38)、ポンポナッツィの再反論 (39)、アヴェロエス側の再反論 (40)、ポンポナッツィの再々反論 (41)、アヴェロエス側の再々反論 (42)、ポンポナッツィの再々々反論 (43-54) という応酬が繰り広げられる。この応酬の最後の部分では、アヴェロエスのほかにトマスも、人間知性が真に不死であることを認めている点で真理からは遠ざかっていることが指摘される (53)。第4章の始めではいわば権威のようにして登場したトマスがその終わり近くでは論駁の対象になるという構成はとりわけ興味深い。トマスに対する本格的な論駁は第8章に持ち越されることになる。最後に第三に、人間の幸福は能動知性と可能知性の連結においてあると考えるアヴェロエスの見解が取りあげられて論駁が行われる (55-59)。

『魂の不死性について』の試訳が完成したあかつきには、さらに充実した解説を書くこともできるだろう。今は以降の試訳を読解するにあたって最低限の道しるべを立てたことでよしとしたい。なお本稿は、下訳を石田が作成した上で訳者二人が検討を加えて作成したものである。註も基本的に石田による。また、第1章と第2章には既に公刊された日本語訳が存在しているため、その部分については訳出の参考とした⁷。(文責：石田)

試訳

マントヴァのピエトロ・ポンポナッツィ

ヴェネツィアの大貴族マルカントニオ・フラーヴォ・コンタリーニ様
 最も親愛なる神にかけて
 ご健勝のこととお慶び申し上げます

(2) 偉大なるコンタリーニ様⁸、私めはできますことなら、私どもの学事暦で休暇となるあいだに、私めがヴェネツィアを訪れることができ、そこで大勢の尊敬する旧友や私を支援してくださるきわめて聡明な皆さまに対して久しぶりにご挨拶し、ご尊顔を拝することができたらしと思ひ続けておりました。それは何よりもまずあなた様に対してのことであります。私めはあなた様に対して、そうあるべきこととして、絶えずお慕い申し上げ尊敬の念を抱いております。しかしながら、私めの願いは大きく裏切られることになってしまいました。と申しますのも私めは、自分の旅支度をほとんど整えたというときになって重く生死をさまよう病に突然かかってしまったのでして、それは何日ものあいだひどく私めを苦しめました。私めの病気が続いていたあいだもいつも、親切心からそのようにな

⁷ 凡例に記載されている伊藤訳のこと。伊藤訳にはほかに、第9章、第14章、第15章の部分訳が含まれている。

⁸ ヴェネツィアの名家の一員で、おそらく1485年から1546年頃に生きた人物である：Bruno Nardi, “Di una nuova edizione del De immortalitate animae del Pomponazzi,” *Rassegna di filosofia*, 4 (1955), 149-74. この献辞から、ポンポナッツィのパトロンでもあったことが窺える。

るのが常のことではありますが、まことに学識があつて礼儀正しい男たちである私めの弟子や近い者が十分なほど多く、私めのところに毎日欠かさず来てくれました。彼らは病状が和らぐように多くの仕方ではたらきかけてくれました。そのあいだにも彼らは、さまざまな異なる問いかけによって、弱っている者を元気づけてくれました。ついには、どのような成り行きだったかはわかりませんが、魂の不死性に関する討論に導かれました。この事柄について、臨席していたすべての者に迫られたこともあり、私めは多くのこまごまとした論を出しました。それを後になってより綿密に再編し整理し直したものを公刊して、あなた様にお名前を掲げてお示しすることにしました。何のためかと申しますと、あなた様と私めは、居場所がわかれているという隔絶によって実の声を聞いたり発したりすること⁹を妨げられておりますので、どのようなものであれ私めの書いたものという紐帯によって確かに結束があるようにし、また所与のものとしてはただそれだけしかないその仕方によってあなた様とお話するためでもあるのです。あなた様ほどのお人にはほとんど相応しくないかもしれませんが、あなた様のご高配を賜りたく、私めのささやかな心づけをお気の召すまに受け取られますことを。どうぞお元気で。

(3) 1516年10月1日

マントヴァのピエトロ・ポンポナッツィによる論考
『魂の不死性について』。
序文

本書の目論見および主題や〔その〕目論見の発端などを含む

(5) 説教者兄弟会〔ドミニコ会〕の兄弟ラゲーサのヒエロニムス・ナターリス¹⁰は、私が芳しくない体調に悩まされていたときに、最も人間味がありわれわれにとって最も親愛なる男として、かなり頻繁にわれわれのところを訪れていた。そしてある日私が病にそれほど患わされていないことに気づくと、顔を伏せて次のように始めた。「最も親愛なる先生、先生が過日『天界について』第1巻をわれわれに解説していて、アリストテレスが不生のものと不滅のものは置換されることを多くの議論によって示そうとしている箇所¹¹に到達したとき、先生は言っていました。諸靈魂の不死性に関する聖トマス・アクィナスの立場は、それが真でありそれ自体ですぐれて堅固であることにはいかなる点においても疑義はないものの、アリストテレスの諸言明とはほとんど一致していないと評価している、と。そのようなわけで、もし先生に差支えがなければ、先生から二つのことをぜひ

⁹ ウェルギリウス、『アエネーイス』、第1巻409行。

¹⁰ おそらくポンポナッツィの弟子で、ポンポナッツィによるアリストテレスの『形而上学』第12巻に関する講義の記録を伝えた一人でもであるとされる：Bruno Nardi, *Studi su Pietro Pomponazzi*, Firenze: Felice le Monnier, 1965, 59–60. なお「ラゲーサ」は現在のドゥブロヴニク（クロアチア）のことだと思われる。イタリア語では「ラゲーザ」。

¹¹ アリストテレス、『天界について』、第1巻第12章282a31–b1（山田道夫=訳、『新版アリストテレス全集5』、岩波書店、2013、74）：「生成のないものは消滅のないものであるとともに、消滅のないものは生成のないものでもあるとすれば、永続的なものもそれらのそれぞれに必然的に含意されることになる。すなわち生成がないのであれば永続的であり、消滅がないのであれば永続的である」。

とも学びとりたいと願っている次第です。すなわちまず一つは、啓示や奇跡を離れて自然の境界の範囲内にあくまで留まりながら、この事柄〔魂の不死性〕について何をお考えになっているかです。次にもう一つは、同じ主題におけるアリストテレスの考えはどのようなものだと評価なさっているかです」。

(6) そして私は、そこに居合わせた者すべてが同じことをとても強く願っていることに気づいたので（実際、多くの者がそばにいた）、次のように彼に〔解答した〕¹²。「最も親愛なる君、そして他の君たちよ、しかし君は容易ではないことを望んでいる。というのも、そうした仕事はとても大変なことであり、名高い哲学者のほとんどすべてがこれには苦勞していたほどだからだ。それでも、君は私に可能な範囲のことだけを、すなわち私が〔アリストテレスの考えは〕どのようなものだと考えているのかを求めているからには、これを君に明かすことは容易であるので、喜んで君の意向に従おう。それに対して、私が考えているような事柄が〔実際には〕どうであるかというもう一方のことについては、もっと専門的な人々〔の著作〕を参照しなさい。それでは、導き手たる神のもとで仕事に取り加かろう」。

第1章

ここでは、人間はどっちつかずの本性をもち、死すべきものと不死のもの
中間にいたることが示される

(8) さて私は、われわれの考察の端緒は次のことから取ってくるべきだということを引き出した。すなわち人間は、一重ではなくて多重の、確かなものでなくてどっちつかずの本性をもち、死すべきものと不死のものの中に位置づけられるということである。そしてこれがはっきりと見てとれるのは、われわれが人間の本質的な諸作用を精査するとしたらのことであり、その作用から〔人間の〕諸本質が知られる。

(9) まず人間は、『魂について』第2巻と『動物の発生について』第2巻第3章で伝えられているように身体の滅びゆく器官なしには行うことのできない栄養摂取と感覚の働きを行うということから¹³、可死性をまとっている。他方で、『魂について』全体、『動物の諸部分について』第1巻第1章、『動物の発生について』第2巻第3章にあるように身体器官なしに行われる作用である知性認識と意志〔の働き〕を行うということから¹⁴、また

¹² ヴェネツィア版だとポローニャ版にない《respon-di》（私は解答した）という語がある。

¹³ アリストテレス、『魂について』、第2巻第1章 412b25-413a6（中畑正志＝訳、『新版アリストテレス全集7』、岩波書店、2014、68）；『動物の発生について』、第2巻第3章 736b22-23（今井正浩、濱岡剛＝訳、『新版アリストテレス全集11』、岩波書店、2020、128）。

¹⁴ アリストテレス、『魂について』、第1巻第4章 408b19-29（中畑訳、47-48）；第2巻第1章 413a6-7（68）；第3巻第4章 429b3-5（146-47）：「しかし知性は、何か高度の知性認識対象を知性認識したときには、より程度の低いものもそれに劣らずに知性認識するのであり、むしろその場合のほうが知性はよりいっそう機能しさえする。なぜなら、感覚は身体なしには機能しえないが、知性は身体から離在するからである」；『動物の諸部分について』、第1巻第1章 641a33-b10（濱岡剛＝訳、『新版アリストテレス全集10』、岩波書店、2016、24-25）；『動物の発生について』、第2巻第3章 736b27-29（今井・濱岡訳、128）：「そこで残されているのは、知性のみが外からやってくるということ、また知性のみが神的であるということになる。なぜなら、身体的な活動は知性の活動にはいささかも与ることがないからである」。

その諸作用は離在可能性と非質料性を支持し、さらに後者〔非質料性〕は不死性を支持するということから、人間は不死のものの中に数えられるべきである。

(10) 以上から全体的な結論を得ることができる。人間は一重の本性をもたない。というのもおよそそのように言ってよければ三つの魂を、すなわち栄養摂取する魂、感覚する魂、知性認識する魂を内包しているからである。そしてどっちつかずの本性を自らに要求する。というのも端的に死すべきものとしても端的に不死のものとしても存在しておらず、むしろ両方の本性を包含しているからである。そのようなわけで、古代の人々は適切に言明していた。彼らは人間を永遠なものと同期的なものあいだに定めていたのである。その理由は、人間が純粋に永遠なものでもなく純粋に同期的なものでもないということであった。というのも人間は両方の本性を分有しているからであり、このように中間に存在する人間には望むなら両方の本性をまとえる権能が所与とされている。

(11) これにより、人間の三類型が見出されるようになる¹⁵。まず或る人々は、わずかな人々ではあるが神々のうちに数えられている。彼らは栄養摂取する魂と感覚する魂を服従させることで、いわば完全に理性的になった人々である。次に或る人々は、知性を完全になおざりにして栄養摂取する魂と感覚する魂にのみかかずらうことで、ほとんど獣に変わり果ててしまった。そしてこれをおそらく言いたかったのがピュラゴラス派の寓話であり、それは人間の魂がさまざまな獣に変移すると言っていた¹⁶。次に或る人々は素朴な人間と呼ばれている。彼らは倫理徳に即して中庸に生きた人々であるが、知性に完全に寄りかかっていたわけではないし、かといって身体的な力なしにすませていたわけでもない。もちろん以上の類型それぞれは、はっきりと見てとれるように、大きな幅を有している。また、以上と一致していることとして、「詩編」[8:6]では「あなたは人間を天使よりも小さいものとした」云々と言われている。

第2章

ここでは、人間本性がもつ既述の多重性を理解できる仕方が示される

(13) かくして、人間の本性は多重でどっちつかずであり、それは実のところ質料と形相の複合に由来するのではなくて、むしろ形相ないし魂そのものの側に由来することを見た。残るところとして見るべきことには、不死であることと死すべきことは対立しており、それは同じものについて肯定できないのだから、これらのことがともに人間の魂について言われるようになるのはどのようにして可能かが正当にも議論されることになる。そして実に、これを見るのは軽々しいことではない。

(14) そこでまずは、死すべきでも不死でもある同一の本性が定められることになるか、

八四

¹⁵ Cf. アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、第1巻第5章 1095b14–19（神崎繁＝訳、『新版アリストテレス全集 15』、岩波書店、2014、26–27）；第7章 1097b34–1098a7（39–40）；『エウデモス倫理学』、第1巻第1章 1214a32–33（荻野弘之＝訳、『新版アリストテレス全集 16』、岩波書店、2016、204）；第4章 1215a35–b1（208）：「すなわち〔人前で活躍する〕ポリス的生活、知を愛する生活、享樂に耽る生活——これらは現にわれわれが目にして三種類の生活なのである」。

¹⁶ Cf. アリストテレス、『魂について』、第1巻第3章 407b21–23（中畑訳、42）：「あたかもそれは、ピュタゴラス派の物語の通りに、任意の魂が任意の身体へと入り込むことができると考えているかのようである」。

あるいは別々の本性が定められることになるかのどちらかである。そしてもし第二のことが所与だとするなら、これを理解するには三つの仕方がありうることになる。まずは〔第一に〕、人間の数に応じて死すべき本性と不死の本性の数が存在することになる。例えばソクラテスには不死の本性が一つと死すべき本性が一つないし二つあり、他のものについても同様であって、各々の人間は死すべき本性と不死の本性を固有なものとして有するといった場合である¹⁷。あるいはむしろ〔第二に〕、あらゆる人間には不死の本性がたった一つしか定められないが、各々の人間に即しては諸々の死すべき本性が分配されて多数化している¹⁸。あるいはむしろ逆に〔第三に〕、不死の本性は多数化しているが、死すべき本性はあらゆる人間に共通していると措定することになる¹⁹。

(15) それに対して、もしもう一方の側がむしろ選択されるなら、すなわち同一の本性によって人間は死すべきで不死であるということであるなら、対立するものが同じものについて言われるようになることは不可能だと思われるので、同一の本性が死すべきで不死であるといったことになるのは端的には不可能である。むしろ人間本性はまず〔第一に〕、端的には不死であり或る点に即しては死すべきであることになるか²⁰、あるいはむしろ逆に〔第二に〕、端的には死すべきであるが或る点に即しては不死であることになるか²¹、あるいはむしろ〔第三に〕、或る点に即しては両方のものとして包含されているかである。〔第三の場合とは〕すなわち、或る点に即しては死すべきで或る点に即しては不死だということである²²。そして実際、こうした三通りの仕方によって矛盾は十分に回避できるはずである。

(16) それゆえまとめるなら、議論してまとめる者には明瞭なことだが、それ〔人間本性の多重性〕は六つの仕方でも思い描くことができることになる。

第3章

ここでは、テミスティオスとアヴェロエスが従った仕方として、
不死の魂は数において一つだが、死すべき魂は多数化していることを
肯定する仕方が措定される

(18) かくして、この六つの列挙された仕方のうち、四つは審判者たちの受け入れるところとなったが、二つは消失した。まず、非質料的な本性は多数化しているが質料的な本性は数において一つだと措定する者は誰もいなかった。それは合理的には次のようなことによる。すなわち或る一つの物体的な事物が、とりわけ可滅的であるなら、それほど多くの区別された場所や基体に²³存在することを思い描くのは不可能だからである。同様に、同じ事物が等しく死すべきでもあり不死でもあると措定する者も誰もいなかった。それ

¹⁷ 第5章と第6章ではプラトン主義者に帰される立場。

¹⁸ 第3章と第4章ではテミスティオスとアヴェロエスに帰される立場。

¹⁹ 論理的な可能性の一つではあるが実際にはありえないとされる立場。

²⁰ 第7章と第8章ではトマス・アクィナスに帰される立場。

²¹ 第9章から第14章でボンポナッツィが与する立場。

²² 論理的な可能性の一つではあるが実際にはありえないとされる立場。

²³ 底本の《suiecto》は《subiecto》の誤植だと解した。

は、何ものも反対する二つのものから等しく構成されるのは不可能であり、一方が他方よりも常に支配的でなければならないということによるのであり、『天界について』第1巻テキスト7と「アヴェロエスの」注解、『生成〔と消滅〕について』第2巻テキスト47、『形而上学』第10巻テキスト23、「アヴェロエスの」『医学大全』（*Colliget*）第2巻で平明に示されている通りである²⁴。

(19) それでは、残る四つの仕方について個別に見ることにしよう。まずはアヴェロエスと、私が考えるに彼の前ではテミスティオスが一致している²⁵。すなわち、知性認識する魂は可滅的な魂と実在的に区別されたうえで、知性認識する魂はあらゆる人間のもので数において一つであるのに対して、死すべき魂は多数化していると措定している。そして「実在的な区別に関する」最初の言明に対する理由は次の通りである。「まず」彼らが見てとったことには、可能知性は混交しておらず非質料的であり、かくして永遠なものだとアリストテレスが端的に証明していて、しかも彼のあらゆる言葉がこれを支持している。それは『魂について』を通覧する者にとって明らかな通りである²⁶。そして彼らは、アリストテレスの論拠がそれ自体で真だと信じていた。そこで、知性は端的には不死だということ肯定した。さらにまた見てとったことには、上「第1章」で引用された箇所から窺えるように感覚する魂と栄養摂取する魂は自らの機能において必然的に身体器官を必要とするが、しかるに、身体器官が物的で滅びゆくものだとすることは必然的であるので、彼らは、そうした魂は端的には死すべきだと結論づけた。しかるに、同じ事物が端的かつ絶対的に、死すべきかつ不死であるといったことになるのは不可能である。それゆえ彼らは、不死の魂が死すべき魂と実在的に区別されていると措定せざるをえなかった。またテミスティオスは、プラトンをこの考えの側に引きつけようとして、これを明白に先取りしているように見える『ティマイオス』におけるプラトンの言葉を引き合いに出している²⁷。

²⁴ アリストテレス、『天界について』、第1巻第2章268b26-269a2（山田訳、20）；『生成と消滅について』、第2巻第3章331a3-6（金山弥平=訳、『新版アリストテレス全集5』、307）；『形而上学』、第10巻第8章1057b23-28（出隆=訳、『旧版アリストテレス全集12』、岩波書店、1968、348）；アヴェロエス、『医学大全』、第2巻第22章。

²⁵ アヴェロエス（イブン・ルシュド）、『アリストテレス「魂について」大注解』、第3巻注解5（花井一典、中澤務=訳、『中世思想原典集成精選4』、平凡社、2019、509-38）；テミスティオス、『アリストテレス「魂について」注解』（*Paraphrasis*）第3巻に関する部分（ロバート・B・トッド=訳、『*On Aristotle's On the Soul*, tr. Robert B. Todd, Ithaca, NY: Cornell University Press, 1996, 124-32）。

²⁶ アリストテレス、『魂について』、第3巻第4章429a18-20（中畑訳、146）：「そうすると、知性がすべての事象を知性認識する以上は、アナクサゴラスの主張するように、それが支配するためには、すなわち認識するためには、混交していないものであることは必然である」；a24-29（同）。

²⁷ プラトン、『ティマイオス』69C-E（種山恭子=訳、『プラトン全集12』、岩波書店、1975）：「そこで神の子らは、父に倣って、魂の不死なる始原を受け取ると、次には、そのまわりに死すべき身体をまるくつくり〔=頭〕、それに乗りものとして身体全体を与えたのですが、またその身体の中に、魂の別の種類のもの、つまり死すべき種類のもの、もう一つつけ加えて組み立てようとしてしました。ところがこの種の魂は、自分のうちに恐ろしい諸情態を、必然的に蔵しているものなのです。——まず第一には、「快」という、悪へと唆かす最大の餌。次には「苦」、すなわちわれわれをして善を回避させるもの。なおまた「逸り気」とか「怖れ」とかいう、思慮のない助言者たち。宥め難い「怒り」。迷わされやすい「期待」——と言ったものがそれです。しかし神々は、これらのものを理をわきまえない感覚と、敢て何にでも手を出したがる情欲と混ぜ合わせて、魂の死すべき種族を構成したのですが、これは止むをえない必然によるものだったのです」（127-28）；72D（134）。

(20) 次に、能動知性であれ可能知性であれ、知性があらゆる人間のもので唯一だということ、逍遥学派のあいだでつとに知られている次の命題から明らかにできる。すなわち「同じ種における諸個体の多数化は量をもつ質料によってのみ可能である」のことであり、『形而上学』第7巻と第12巻、『魂について』第2巻に書かれている通りである²⁸。

(21) そして、この仕方に対する疑問がどのようにして解消されるのかは、彼らおよび彼らの学派の著作を見ることによって明らかとなる。だがここでは、簡潔にすませて必要なことにのみ言及するとしよう。

第4章

ここでは、既述のアヴェロエスによる見解が論駁される

(23) この見解は、われわれの時代にあつてはつとによく知られており、ほとんどすべての人が確固としてそれをアリストテレスの見解だとしているものの、やはり私が思うに、それ自体で甚だしく偽であるのみならず、理解不可能で怪異でもあり、さらにアリストテレスとは無縁のものである。むしろ私が考えているところでは、アリストテレスがそれほど愚かなことを信じたわけではないし、また考えに及ぶことさえなかっただろう。

(24) まず始めに、それが偽であることについては何も新しいことを付け加えるつもりはなく、ただ読者にはラテン人の光輝たる聖トマス・アクィナスが書いていることを参照してもらいたい。それは彼の著作『知性の単一性について』、『神学大全』第1部、『対異教徒大全』第2巻、『定期討論集 魂について』や他の多くの箇所のことである²⁹。それというのも、この見解に対する論駁がとても明快かつ精妙になされているからであり、かくして私の考えによればトマスは、言及されていないこと³⁰を何も残しておらず、また

²⁸ アリストテレス、『形而上学』、第7巻第8章 1034a5-8（出訳、233）：「そして、すでにそこに全一的なもの存するとき、すなわちこのような形相がこれなる肉や骨のうちに存するとき、これがカルリアスでありあるいはソクラテスである。この二人は、それぞれその質料の点では異なっている（というのは質料はそれぞれ異なるからである）、しかし形相においては同じである（というのは形相は不可分だからである）」；第12巻第8章 1074a33-35（426-27）；『魂について』、第2巻第2章 414a25-27（中畑訳、74）：「そしてそのような観察事実は、まさに理論的にも納得のいくものである。なぜなら、それぞれのものの終極実現状態は、「可能状態においてそれぞれのものであるもの」のうちに、つまりそれぞれに固有の素材のうちに成立することが、その自然本来のあり方だからである」。

²⁹ トマス・アクィナス、『知性の単一性について』、第3章～第5章（水田英実＝訳、『中世思想原典集成精選6』、平凡社、2019、231-74）；『神学大全』、第1部第76問題第1項～第2項（高田三郎、大鹿一正＝訳、『神学大全VI』、創文社、1962、33-51）；第79問題第5項（158-60）；『対異教徒大全』、第2巻第73章（川添信介＝訳、『トマス・アクィナスの心身問題——『対異教徒大全』第2巻より』、知泉書館、2009、154-85）；同巻第75章（198-215）；『定期討論集 魂について』、第3問題（井上淳＝訳、「『可能知性もしくは知性的な魂は全ての人に一つであるか』—トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第3問題について—」、『南山神学』、第39号、2016、181-223）。

³⁰ 『intactum』を「そこなわれていない」という意味で読み込むと、この語は「まだ意見としては有効な部分がある」という意味で理解することもできる。その場合は、トマスがアヴェロエスを徹底的に論駁しているという側面がさらに強調されることになる。ゴンティエの仏訳（20）はそのように理解していると思われる。

誰かがアヴェロエスのために付け加えることのできる反論もすべて論駁したうえで棄却している。実際、彼は全体を論駁し、解体し、無効化しており、[この]神々しい至聖のごとき男に対する侮辱や呪詛よりほかにアヴェロエス派には逃げ場が残されていない。

(25) 次に二つ目をめぐっては、私がおそらくとした確信を抱いているわずかなことを付け加えることにした。すなわち、これはアリストテレスとは無縁であり、またこれはかのアヴェロエスが拵えた虚構であり怪異だということである。

(26) 第一には次の通りである。そのような知性認識する魂は、基体や対象³¹としての身体には完全に依存しない或る作用を有するか、あるいは全く有さないかのどちらかである。[しかるに、]二つ目が所与であることはありえない。というのも、それはアヴェロエスにも理性にも抵触するからである。まずアヴェロエスについては次の通りである。彼は『魂について』第1巻に対する注解12において、注解の末尾でこう言っている。「アリストテレスは以上によって、この説明から表面的に窺われることを、すなわち知性認識は想像がともなう場合のみ存在するというを言おうとしているのではない。というのも、その場合に質料的知性³²は生成消滅が可能であることになるからであり、それは[アフロディシアスの]アレクサンドロスが理解しているかぎりのことである」³³。以上から明らかなことには、アヴェロエスによれば知性は身体には完全に依存しない或る作用を有している。これは理性によっても確固とされる。なぜなら、知性は基体によって存在するように構成された形相ではなく、だから存在において基体に依存するものではないので、作用は存在に付き従うということにより、知性は作用においても[基体に]依存するものではないからである。

(27) だが十分に明らかなことには、これはアリストテレスと一致せず、彼の考えと反

³¹ 知性認識する魂にとって身体が基体 (subiectum) や対象 (obiectum) と言われることについて、ボンポナツィの理解が示されるのは第9章においてである。第4章の後半部分も参考になる。なお、身体をこのような二つの対によって理解することはトマスにおいても見られる：『命題集注解』、第4巻第50区分第1問題第1項第2異論解答 (*Sancti Thomae Aquinatis Opera omnia*, Tom.7, Vol.2, pars altera, Parma, 1858, 1247-48) 「知性認識は、それが知性から出てくることに即しては、(知性は何らの身体器官を媒介とせずに知解するので) 魂と身体に共通な能動ではないが、対象 [obiectum] の側からは魂と身体に共通な能動である。それは、身体器官のうちにある表象像から抽象することでわれわれが知性認識するかぎりでのことである」(拙訳)；『第10任意討論集』、第3問題第2項第1異論解答 (ターナー・ネヴィット、ブライアン・デイヴィス=訳、*Thomas Aquinas's Quodlibetal Questions*, tr. Turner Nevitt and Brian Davies, Oxford: Oxford University Press, 2020, 140)；『定期討論集 魂について』、第1問題第11異論解答 (藤本温=訳、「トマス・アクィナス『定期討論集 魂について 第一問題』翻訳」、『プラトン主義の受容と変容を通じての古典の普遍性の研究』(山口義久=研究代表者、科学研究費補助金研究成果報告書)、2006, 98)；『知性の単一性について』、第1章 (水田訳、216-17)。

³² 「質料的知性」は「可能知性」を指す別の名称でもあり、古くはアフロディシアスのアレクサンドロスにまで遡ることができる。アヴェロエスもそうした文脈のなかでしばしば「質料的知性」という表現を用いているが、「可能知性」に相当する表現も用いている。それに対して、例えばトマス・アクィナスは一貫して「可能知性」と言っている。

³³ アヴェロエス、『魂について』大注解』、第1巻注解12 (リチャード・C・テイラー=訳、*Long Commentary on the De Anima of Aristotle*, tr. Richard C. Taylor, with Thérèse-Anne Druart (subeditor), New Haven & London: Yale University Press, 2009, 16)。注解の対象であるテキスト12は403a3-10のことである。

対でもある。というのも、アリストテレスは『魂について』第1巻の引用されたテキスト12の末尾において、知性認識は表象能力であるか、あるいは表象能力なしには存在しないかだと言っているからである³⁴。たしかに彼はここでは条件文のなかで語っているとはいえ、『魂について』第3巻のテキスト39では非常に明らかな仕方で、知性認識は表象像なしには存在しないと言っている³⁵。これは経験によっても証明されることである。したがって、アリストテレスによれば人間知性は、身体には完全に依存しない作用をいかなる仕方によっても有さない。これは「アヴェロエスによって」認められていることと対立する。

(28) これに対して私は、アリストテレスは人間の知性認識について議論を提示し、しかもそれはまさにその知性によって人間が知性認識する者だと言われるかぎりでのことであるという反論だけを見るとしよう。[その反論によれば] まず、知性が常に表象像を必要とするということが真とされるのはそうしたかぎりでのことである。実際、[可知的形象を] 獲得する前における新規の知性作用においてそれは明白であるし、さらに永遠の知性作用ないし「可知的形象の」獲得そのものにおいてもそれは真であることを保持している。というのもアヴェロエスによれば、可能知性が能動知性を形相として受け入れる態勢にあるのは、彼が『魂について』第3巻に対する注解39で言うように、保存される際に感覚的な力に依存する観照的な諸性向「*habitus speculativi*」によってだからである³⁶。しかるに、もし知性がそれ自体で解されるなら、それは決して表象像に依存しない。

(29) さて、たしかにこれは十分巧みに言われてはいるが、全く前進していないと思われる。理由は次の通りである。魂の共通な定義によれば、魂は自然的で器官的な身体の実態「*actus corporis physici organici*」云々である³⁷。だから、知性認識する魂は自然的で器官的な身体の実態である。かくして、存在に即して知性は自然的で器官的な身体の実態であるのだから、自らのはたらきすべてにおいても基体としての器官および対象としての器官に依存することになる。それゆえ、知性が器官から全面的に解放されることには全くならない。

(30) これに対しては次のように言われるかもしれない。魂については他の知性体と同様である。まず、注釈家「アヴェロエス」自身が『魂について』第3巻に対する注解19で、魂は知性体のなかでは最後のものだと措定している³⁸。しかるに、他の知性体は二通

³⁴ アリストテレス、『魂について』、第1巻第1章403a8-10（中畑訳、18）：「この知性認識することもまた、一種の表象のはたらきであるか、あるいは表象のはたらきを抜きにしては成立しえないものであるとすれば、知性認識することも身体を欠いてはありえないであろう」。

³⁵ アリストテレス、『魂について』、第3巻第8章432a8-10（中畑訳、162）：「何も感覚しなければ、何一つ学んだり理解することはないであろうし、また知を行使して観想するときには、必然的に表象を伴って観想するのである」。ポンボナツィはおそらく「必然的に表象を伴って観想する」という部分を念頭に置いている。なおテキスト39は432a3-14である。

³⁶ アヴェロエス、『「魂について」大注解』、第3巻注解39（テイラー訳、404-5）。

³⁷ Cf. アリストテレス、『魂について』、第2巻第1章412b4-6（中畑訳、66）。

³⁸ アヴェロエス、『「魂について」大注解』、第3巻注解19（花井・中澤訳、577）：「アリストテレスに従う限り、離散的知性の序列において最下層の知性がこの質料的知性であると考えべきである」。注解の対象であるテキスト19は430a17-20のことである。

りの仕方でも考察されうる。一方の仕方ではそれ自体においてであり、天体を作動させないかぎりでのことである³⁹。そしてその場合、その知性体は魂ではないのであり、知性認識や欲求といったいかなる仕方でも身体に依存しない作用を有する。それに対して、もう一方の仕方では天体を作動させるかぎりでも考察されうる。そしてその場合、その知性体には魂であることが合致し、さらには魂に関する所与の定義も合致する。それというのもその場合、注釈家自身が『魂について』第3巻に対する注解5で言うようにこの定義はほとんど異義的に言われてはいるものの⁴⁰、その知性体は自然的で器官的な身体の実態だからである。実際、注釈家自身も『天球の実体について』で言うようにほとんど異義的ではあるが⁴¹、アリストテレスが『自然学』第8巻、『天界について』第2巻、『形而上学』第12巻で措定するように⁴²、天体は魂のあるもの〔animal〕である。

(31) かくして、知性認識する魂もやはり二通りの仕方でも考察されうることになる。まず一方の仕方は、それが知性体のうちで最下位であるかぎりでのことであって、自らの領域、つまりは人間に対する秩序においてのことではない。そしてその場合、知性認識する魂はいかなる仕方によっても、すなわち存在においても作用においても身体に依存しない。かくして、そうしたかぎりでの知性認識する魂は自然的で器官的な身体の実態でもない。それに対して、もう一方の仕方では自らの領域に対する秩序において考察されうるものであり、このかぎりでは自然的で器官的な身体の実態である。かくして、そうしたかぎりでの知性認識する魂は、存在においても作用においても身体から解放されていない。そのようなわけで、人間の形相であるかぎりは作用において表象を常に必要とするが、端的にそうであるわけではない。それは上述の通りである。

(32) そしてこのやり方によれば、どのようにして自然学者は知性認識する魂について考察するのかというよくある疑問が解決されうる。アリストテレスがやはり『〔動物の〕諸部分について』第1巻第1章で、知性認識する魂については自然学者の関わるころではないと言っていて、それは知性認識する魂が動かされずに動かすものだからであり、またそこで言われている他のこともあるからである⁴³。解決されると私が言うのは次の通りだからである。魂であるかぎりでの知性認識する魂は自然学者の関わるころである。む

³⁹ つまり天体の動かし手として知性体を捉えるのではないということ。

⁴⁰ アヴェロエス、『魂について』大注解、第3巻注解5（花井・中澤訳、529）：「知性の第一現実態が靈魂の他の諸能力の第一現実態とは異なっていること、また「現実態」という語がアレクサンドロスの所見に反して、双方のあいだで二義的に語られているということは明らかである」。

⁴¹ アヴェロエス、『天球の実体について』、第1章（アーサー・ハイマン＝訳、*Averroes's De substantia orbis*, Critical Edition of the Hebrew Text with English Translation and Commentary by Arthur Hyman, Cambridge (Mass.), Jerusalem: The Medieval Academy of America, The Israel Academy of Sciences and Humanities, 1986, 71-72)。

⁴² アリストテレス、『自然学』、第8巻第2章 252b24-27（内山勝利＝訳、『新版アリストテレス全集4』、岩波書店、2017、382）：「しかし、それが動物のうちに生じうるのであれば、その同じ事態が万有的な規模で起こることに何の支障があろうか。小宇宙たる動物のうちに生ずることであれば、大宇宙においても生ずるからである」；『天界について』、第2巻第12章 292a20-21（山田訳、116）；『形而上学』、第12巻第7章 1072b27-30（出訳、420）。

⁴³ アリストテレス、『動物の諸部分について』、第1巻第1章 641a33-b10（濱岡訳、24-30）。

しろ以上の考察によれば、知性体は自然学者によって考察されるのに対して、人間の魂が知性であるかぎりでの知性認識する魂は、他の上位の知性と同様に形而上学者の仕事に属する。

(33) しかしながら、実のところこうした反論は多くの点で欠陥があると思われる。まず始めには次の通りである。もし他の知性体についてと同じ判断が人間の魂についてもあったとするなら、アリストテレスが『形而上学』第12巻で知性体について論じているとき⁴⁴、人間の魂についても論究していたはずであろう。だが、彼はそれを全くといっていいほどしていなかった。

(34) さらには、もし知性体についてと同じ判断が人間知性についてもあるなら、なぜその場合にアリストテレスは、『自然学』第2巻に対する注解26のテキストで、自然学者による考察の終着点を人間の魂だと措定しているのか⁴⁵。何のことかといえば次の通りである。もしアリストテレスが[考察の終着点を]「存在すること」[quia est]に関して理解しているとするなら、それは偽である。それというのも、自然学者は神や知性体が「存在すること」を論証しており、また『魂について』第1巻に対する注解2と『形而上学』第12巻に対する注解36における注釈家[アヴェロエス]自身によれば、神学者は自然学者からそうしたことを受け取っているからである⁴⁶。それに対して、もしアリストテレスが「何であるか」[quid est]に関して語っているとするなら、所与の反論に即して知性体が自然学者の関わるところでないことは十分に明らかである。というのも、そうしたかぎりでの人間知性は動かされずに動かすものであり、また反論が言っているように、アリストテレスが引用された『[動物の] 諸部分について』第1巻の章で言いたかったのはこのことだからである。

(35) さらには、数においては一つの能力である知性認識する魂が二つの知性認識する仕方、すなわち身体に依存する仕方と依存しない仕方を有すると言うのはばかげていると思われる。それというのも、その場合に知性認識する魂は二つの存在を有することになってしまうと思われるからである。まず知性体は、知性かつ魂であり、自らの知性認識においては身体を必要としない一方で、運動においては身体を必要としてしまう。しかるに、場所的な運動と知性認識はかなり異なった作用である。そして魂には諸々の知性作用が措定されることになり、そのうちの一方は身体に依存するが、他方は端的に[身体から]解放されていることになる。こうしたことが理性と一致しているとは思われない。というのも、同一のものの観点で一つの作用に属するのは作用する一つのあり方のみだと思われるからである。

(36) さらには、数において一つのものが同じ対象という観点でほとんど無限個の作用

⁴⁴ アリストテレス、『形而上学』第12巻第8章1073a14-74a38（出訳、421-27）。

⁴⁵ アリストテレス、『自然学』第2巻第2章194b9-15（内山訳、81-82）。

⁴⁶ アヴェロエス、『「魂について」大注解』第1巻注解2（テイラー訳、2-3）；『「形而上学」大注解』第12巻注解36（シャルル・ジュヌクアン＝訳、Charles Genequand, *Ibn Rushd's Metaphysics: A Translation with Introduction of Ibn Rushd's Commentary on Aristotle's Metaphysics, Book Lām*, Leiden: E.J. Brill, 1984, 148-50）。前者の注解におけるテキスト2は402a4-6のことであり、後者の注解におけるテキスト36は1072a26-29である。

を同時に有しているといったことは不必要であり信じるべきではないと思われる。ところが、[アヴェロエスの] 立場によればこれが帰結する。なぜならかの知性は、永遠の知性作用によっては神を知性認識し、新規の知性作用によっては人間たちが神について知性認識する分だけの知性作用を神に関して有しているからである。だがこれは、多くのことから明らかにできるように、単なる虚構だと思われる。だからといって知性体が身体なしには知性認識する一方で身体なしには場所的に運動しないとしても、いかなる不都合も帰結しない。というのも、知性認識と場所的な運動は一方は内向的でもう一方は外向的であるからかなり異なる類の作用であるのに対して、知性認識する魂については正反対のことが起こっているからである。実際[永遠の知性作用と新規の知性作用の] 両方とも知性作用であるし、両方とも内向的な作用だからである。

(37) 主要な点に対して第二には次の通りである⁴⁷。もし、既述の注釈家[アヴェロエス]が思い描くようにアリストテレスによれば知性認識する魂は真に非質料的であるなら、それは自明なことではなくむしろ最大限に疑うことのできることなので、何らかの証拠によって明白化しなければならない。さてアリストテレスによれば、[身体からの] 離在不可能性を結論づけるためには、それが器官的な力であるということ、あるいはもし器官的な力でないなら、物的な対象なしにははたらきに向かうことができないということさえあれば十分である。というのも、彼が『魂について』第1巻テキスト12で言うことには、もし知性が表象能力であるとするなら、あるいはそれが表象能力なしには存在しないとするなら、それが離在することはありえないからである。しかるに、離在可能性と離在不可能性は対立しており、また選言的な肯定文は対立する部分から作られた連言的な肯定文と矛盾するのだから、もし離在不可能性にとっては選択肢として、基体としての器官において存在するということか、あるいは対象としての器官に依存するということかのどちらかで十分であるなら、離在可能性に対しては連言的に、基体としての器官にも依存しない対象としての器官にも依存しないということが少なくともその或る作用において必要とされる。そしてまさにこのことについて問題となっている。それでは、どのようにしてアヴェロエスは魂が不死であることを確証することになるのだろうか。というのも特に、知性認識する者は表象像を観照しなければならないとアリストテレスが言っているからであり⁴⁸、また人間なら誰でもこれを自分自身で経験しているからである。

(38) これに対しては次のように言われるかもしれない。『魂について』第3巻の議論が端的に、魂が不死であることを証明している。それというのもすなわち、魂はあらゆる質料的な形相を受容するからである⁴⁹。これにもとづいて後にはっきりと結論づけられることには、魂は[身体には] 完全に依存しない作用を有している。というのも、作用は存在に付き従うからである。

(39) しかしながら、これは妥当ではないと思われる。理由は次の通りである。アリストテレスの議論が前提していることには、知性は身体によって動かされる。というのも彼

⁴⁷ 段落26から始まる議論がようやく前段落で終わり、ここから第二の議論が示される。

⁴⁸ アリストテレス、『魂について』、第3巻第8章432a6-10（中畑訳、161-62）。注35も見よ。

⁴⁹ アリストテレス、『魂について』、第3巻第4章429a15-20（中畑訳、145-46）。注26も見よ。

が言うことには、知性認識は感覚のようであり可能知性は受動的な力だからである。また彼が後で明言することには、知性を動かすものは表象像である⁵⁰。しかるに、既述のことによれば、表象像を必要とするものは質料からは離在不可能である。したがって、彼の議論は知性が非質料的であるよりもむしろ質料的であることを証明している。

(40) だが、さらに次のように言われるかもしれない。知性が基体としての器官を必要としないということによれば、知性は端的に非質料的である。アリストテレスはそうした議論を言及された議論の後で直ちに行っている⁵¹。

(41) しかしながら、これは前進していないと思われる。理由は次の通りである。そうした条件〔すなわち知性が基体としての器官を必要としないこと〕だけで十分であるか、あるいはもう一方の条件が、すなわち知性は身体器官によって動かされないことが必要とされる。もし両方の条件が必要とされるなら、[段落 39 における] 先ほどの議論が成立する。もし前者だけで十分であるなら、アリストテレスの判断が崩壊する。というのも、彼は両方の条件が必要とされると措定しているからである。

(42) だが、さらに次のように言われるかもしれない。実のところ一方の条件だけが必要とされている。理由は次の通りである。基体としての身体を必要としないということは非質料的能力であることを絶対的に指示しており、逆もまたそうである。しかるに、非質料的であるということにくわえて、知性は〔身体には〕完全に依存しない或る作用を有しているはずである。それというのも、もし知性が非質料的であるなら、それは依存しない或る作用を有し、逆もまたそうだからである。それにもかかわらず知性は、対象には依存しない作用にくわえて、〔身体に〕依存した作用を有していることもありうる。それゆえ、依存した或る作用を有しているということから、知性は依存した作用すべてを有するのだといったことを誰も決して憶測しないようにするためにアリストテレスは、もし知性認識が表象能力なしには存在しなかったとするなら、と付け足した。このかぎりではそれはあらゆる作用において表象能力を必要とするであろう。〔そして〕知性は疑いなく離在不可能であることになるであろう。

(43) しかしながら、これは成立しえないと思われる。第一には、アリストテレスは不必要にもう一方の条件〔すなわち知性は身体器官によって動かされないこと〕を付け足したことになってしまうからである。というのも、結論を導出するには一方の条件〔すなわち知性が基体としての器官を必要としないこと〕で十分なことになるからである。こうしたことをかくも偉大な哲学者に帰するのは間違っている。

⁵⁰ アリストテレス、『魂について』、第3巻第4章 429a13-15 (中畑訳, 145): 「そこで、知性認識することがちょうど感覚することに類似したものであるとすれば、知性認識するということは知性認識されるものによって何らかの作用を受けることであるか、あるいはそれとは異なるにせよそれに類似したものであることになるだろう」。なお、この箇所をポンボナツィは「後で」(inferius) と言っているが、実際にはこの箇所は前段落で話題にされたと思われる箇所よりも前にある。

⁵¹ アリストテレス、『魂について』、第3巻第4章 429a24-27 (中畑訳, 146): 「それゆえ知性が身体と混合しているというのも不合理である。なぜなら、もしそうだとすれば、知性は、冷であれ熱であれ、ある特定の性質のものということになるだろうし、さらには、感覚能力をもつものについてはそうであるように、ある特定の器官が知性についても存在することになるからである。だが、実際にはそのような器官はまったく存在しない」。

(44) 第二には次の通りだからである。もし知性が自らののはたらきすべてにおいて表象像を必要とするなら、それが離在不可能であることが導出される。[しかるに、] このことが可能であるのは、[アヴェロエスの] 立場によれば知性が器官的だからにほかならない。ちなみに私が器官的と言うのは基体としてである。というのも、所与のことによれば、基体としての器官的なものと認識の質料的な力は置換されるからである。かくして基体としての非器官的なものと非質料的なもの[すなわち非質料的な認識能力]も同様である。それゆえ、対象として身体を常に必要とすると言うことは基体として身体を必要とするということである。その場合、「もし知性認識が表象能力なしには存在しないなら」とアリストテレスが言うとき、新しいことは何も言われていないはずである。というのは、表象能力であることと表象能力なしには決して存在しないことは端的に置換されるし、一方はもう一方のことを明言しているからである。それゆえ、「もしソクラテスが人間でないなら、あるいは理性的動物でないなら、彼は教育されえない」と誰かが言った場合と類似していることになるであろう。こうした言説がどれほどばかげていてアリストテレスの威厳とは無縁であるのかについては、他の人々の判断に委ねたい。

(45) さらに、或るものが真理の原因を二つ有している場合、一方が取り除かれてももう一方が残るなら、その或るものも劣らず残る。それが自明であるのは、選言文の真理にとっては一方の部分が真であることで十分な場合である。しかるに、知性が質料から離在不可能であることが真とされるのは、『魂について』第1巻で明らかのように、それが表象能力であるか、あるいは表象能力なしには存在しないかのどちらかのゆえである⁵²。したがって、それが表象能力であるということが除去されても、表象能力なしには存在しないものであるかぎり、知性が質料的であることは劣らず真とされるであろう。しかるに、[アヴェロエスの] 立場によればこれは偽である。なぜなら、それによれば、知性が離在不可能でありながら表象能力ではないことは不可能だからである。というのも、その立場にあっては、それら[すなわち離在不可能であることと表象能力であること]は置換されるからである。それゆえ、基体としての器官的なものと質料的なものは置換されるということを措定し、同様にそれらの裏を、すなわち基体としての非器官的なものと非質料的なものは置換されるということを措定する立場は偽である。

(46) さらに、或る事柄に対して二つの仕方が選言の下で割り当てられるときはいつでも、その事柄は、自らは残存しながら、二つの仕方のどちらかから無差別に分離できるか、少なくともその一方からは[確定的に]分離できる。例えば、けちには二通りありうる。すなわち貪欲によってか、あるいは放漫によってかである⁵³。だから、放漫ではないが貪欲な者がけちであることも見受けられるし、貪欲ではないが放漫な者がけちであることも見受けられる。実際、もし貪欲と放漫が分離できないとしたら、実のところけちには二つの仕方がないことになり、むしろそれらは相互に合致したものであるか、あるいは両方とも選言ではなく連言の下で必然的にけちと共起するということになってしまう。それというのも、もし誰かがけちであるのは同時に放漫かつ貪欲である場合のみであったとするなら、正しく言われるべきは、けちに対して放漫あるいは貪欲が必要とされるというこ

⁵² 注34を見よ。

⁵³ Cf. アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、第4巻第1章 1119b27-32（神崎訳、142）。

とではなくて、放漫かつ貪欲であることが連言となってけちを構成するということだっただろうからである。したがって、もし魂の離在不可能性にとっては魂が表象能力であること、あるいは表象能力なしには存在しないことで十分なら、魂が離在不可能であることが成立するのはその諸条件のどちらかが無差別に存在しない場合か、少なくともどちらかが確定された仕方では存在する場合のどちらかである。もし前者なら、知性は表象像なしには存在しないが表象能力ではないということが成立することになり、そこから帰結することには、知性は基体としてではなくて対象としての身体を常に必要とするということになるが、これは論敵によって認められていることの反対である。それに対して後者が、すなわちどちらかが無差別にではなくて確定された仕方では存在する場合が所与であるとするなら、知性が対象としてではなくて基体としての或る⁵⁴ 身体を必要とするということにはなりえないので、知性は基体としてではなくて対象としての身体を必要とするということが成立することになる。それゆえ、前と同じである。

(47) さらには、[アヴェロエスの] 立場によれば、知性は身体には完全に依存しない或る作用を有している。これは疑うことのできることであるので、何らかのしるしによって確認されなければならない。そしてそのことが確認されうるためには知性が非質料的であるということだけを思い描くしかない。だがこれも最初のものに劣らず疑うことのできることであるので、論証が必須である。したがって、その中間[命題]について問題とされる。すなわち、知性は基体としての身体にも対象としての身体にもともに依存しないということなのか、あるいは基体としての身体には依存しないということだけであるのかである。

(48) 前者が所与であることは不可能である。なぜなら[第一に]、そうすると論点先取があることになってしまうからである。というのもわれわれは、知性が自らの或るはたらきにおいて身体に依存しないことを言おうとする際には知性が非質料的であることを前提しているし、また、知性が非質料的であることを証明する際には知性が或るはたらきにおいて身体に依存しないことを受け取っていることになるからである。またなぜなら[第二に]、知性そのものが対象としての身体に依存することがそれにおいて解されるような中間[命題]しかないからである。まず、『魂について』第3巻の第一論証が、知性はあらゆる質料的な形相を受容するがゆえに非質料的であることを証明している。しかるに、アリストテレスが同書で言うように、そうした受容は受動のうちに存立している⁵⁵。それゆえ、知性は物的な事物によって動かされることになり、かくして対象としての身体を必要とすることになる。第二論証によればすなわち、可知的形象は器官ではなくて知性そのものにおいて受容される。それゆえ、前と同じである。というのも、受容とは受動だからである。

(49) したがって、後者の選言肢、すなわち中間[命題]とは知性が対象としての身体は必要とするものの基体としての身体は必要としないということであると云わなければならない

⁵⁴ ボローニャ版で《aliquod》となっているところをゴンティエはそのまま採用しているが、読みやすさのために《aliquo》と読み替える。ヴェネツィア版ではすでにそのようになっており、ジェンティーレ、モッタ、モイジッシュもこの読みを採用している。

⁵⁵ アリストテレス、『魂について』、第3巻第4章 429a13-29 (中畑訳、145-46)。

らない。だがもしそうだとするなら、だからこそアリストテレスは、聞き手の注目を引きつけながら、『魂について』の序文で「その作用についてあらかじめ理解しなければならない」と言った⁵⁶。そして続けて「もし知性認識が表象能力のようであるか、あるいは表象能力なしには存在しないなら、魂が離在するのはありえないのか」と言った⁵⁷。そのようなわけで、離在不可能性とは対立する離在可能性を結論づけるためには、知性が表象能力ではないということとそれが自らのはたらきのいずれにおいても表象能力に依存しないということを連言的に解さなければならない。そこから帰結することには、知性は少なくとも自らの或るはたらきにおいて基体としての身体にも対象としての身体にも依存しないのでなければならない。これは〔アヴェロエスによって〕認められていることと対立する。

(50) これはまた次のようにして論敵によって確固とされる。基体として身体を必要とすることと質料的な力であることは置換されるし、それらの裏も、すなわち基体として身体を必要としないことと非質料的な力であることも置換される。というのは、『[分析論]後書』第1巻にあるように、もし肯定が肯定の原因であるなら、否定は否定の原因だからである⁵⁸。

(51) それではなぜアリストテレスは、質料性を結論づけるために「表象能力であること」のほかに「表象能力なしには存在しないこと」を付け足したのか。というのも、質料性の厳密な原因は基体としての身体を必要とすることであるのだから、彼は原因でないものを原因とする誤謬によって過ちを犯していることになるからである。

(52) これはまた次のようにしてきわめて明白に確固とされる。非質料性のためには、基体としての身体を必要としないことのほかに、これにくわえて、自らの或る確定されたはたらきにおいて対象としての身体を必要としなければならないか、あるいはそうでなくてもよいかのどちらかである。〔アヴェロエスによって〕認められていることによれば、後者が所与であることは不可能である。なぜなら、基体としての身体を必要としないことと或る確定されたはたらきにおいて対象としての身体を必要としないことは置換されるからである。かくして、一方が措定されるともう一方が措定される。したがって、非質料性は両方を連言的に要求するということが残る。かくして、質料性は非質料性の反対であるのだから、質料性そのものにとっては基体としての身体を必要とするか、あるいは対象としての身体を必要とするかのどちらかで十分である。したがって、それらが分離可能だとすると、それらは置換されないが、それは〔アヴェロエスによって〕認められていることの反対である。あるいは、それらが分離不可能であるとすると、それらは選言の下で宛てがわれるべきではないことになるが、アリストテレスはそれを行っている。そして、最終的な帰結は明らかである。なぜなら、選言的に言明されることは選択肢のなかで真とされるのであって連言的ではないからである。それは、アリストテレスが『形而上学』第10巻テキスト17で、注釈家〔アヴェロエス〕が『天界について』第3巻に対する注解56で、ボエティウスが『仮言三段論法について』で言うように、あらゆる部分がそこでは真

⁵⁶ アリストテレス、『魂について』第1巻第1章402b12-13（中畑訳、16）。

⁵⁷ アリストテレス、『魂について』第1巻第1章403a8-10（中畑訳、18）。注34も見よ。

⁵⁸ アリストテレス、『分析論後書』第1巻第13章78b20-21（高橋久一郎=訳、『新版アリストテレス全集2』、岩波書店、2014、386）。

とされる選言的な問いかけは空しくてばかりしているからである⁵⁹。さらにはその場合、選言文ではなくて、対立する部分からつくられた連言文が連言的な肯定文に矛盾することになってしまう。これはきわめて明確に偽である。

(53) そのようなわけで、私が間違っていなければ、注釈家 [アヴェロエス]、聖トマス、ひいてはアリストテレスは人間知性が真に不死だと見なしていたと考える人は誰であれ、真から遠く隔たっている。

(54) さらに驚くべきことには、アリストテレスは知性が表象像なしに知性認識するときもあると措定していたが、彼があらゆる箇所で行っているのは知性認識が表象像なしには存在しないということである。というのも、彼はそれほど絶対的に明言するべきではなかったからである。

(55) 主要な点に対して第三には次の通りである⁶⁰。注釈家 [アヴェロエス] によれば、彼が『魂について』第3巻に対する注解36で明白に示しているように、人間の幸福は能動知性と可能知性の連結において措定しなければならない⁶¹。

(56) しかしながら、これがいかに空しいものでありアリストテレスと不一致であるかを見るのは難しくない。まず空しいものであるのは次の通りだからである。歴史が伝えるかぎりでは、この時代にいたるまで誰も [そうした連結を達成した者としては] 見出されていない。そうだとすると、人間の目的は空虚である。というのも、誰によっても達成されていないからであり、またその目的に対して秩序づけられている中間物を有することができないので、そもそも誰によっても達成されえないからである。実際、プラトンが『国家』第10巻で言うようにいかなる人間もすべてを知ることは不可能であるし⁶²、観照されうることもそうである。むしろ経験によって明らかのように、今日にいたるまでいかなる知も完全に有されていない。

(57) また、それがアリストテレスと反対であることも明白である。なぜなら彼は、『[ニコマコス] 倫理学』において人間である限りにおける人間の究極目的について規定しているところでは、究極目的を知恵の性向において措定しているからである⁶³。また、この本が完成されていないと誰も言うことはできない。というのも、明白なことに彼は、この本の終わりに結文を書いているし、自ら『政治学』に連絡させているからである⁶⁴。

(58) かくして、私は激しく驚かざるをえない。というのもアヴェロエスは、こうした

⁵⁹ アリストテレス、『形而上学』、第10巻第5章 1055b30-1056a1 (出訳、339)；ポエティウス、『仮言三段論法について』、第3巻第10章第6節～第7節 (ルーカ・オベルテッロ＝訳、*De hypotheticis syllogismis*, Testo, traduzione, introduzione e commento di Luca Obertello, Brescia: Paideia Editrice, 1969, 383-85)。

⁶⁰ 段落37から始まる議論がようやく前段落で終わり、ここから第三の議論が示される。

⁶¹ アヴェロエス、『魂について』大注解』、第3巻注解36 (テイラー訳、398-401)。

⁶² プラトン、『国家』第10巻 598C-D (藤澤令夫＝訳、『プラトン全集11』、岩波書店、1976、699-700)。

⁶³ アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、第10巻第7章 1177b24-26 (神崎訳、423-24)：「人間の完全な幸福とは、この観想的な活動であるということになる。ただし、その場合、人生の長さも完全なものであることを要する。なぜなら、幸福に関わる事柄において、不完全なものは何もないからである」。

⁶⁴ アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、第10巻第9章 1181b15-24 (神崎訳、439-40)；『政治学』、第1巻第1章 1252a1-3 (神崎繁、相澤康隆、瀬口昌久＝訳、『新版アリストテレス全集17』、岩波書店、2018、18)。

ことがアリストテレスによってはどの箇所でも措定されていないなかであって、アリストテレスに知性のこうした一性を帰しているからである。むしろアリストテレスは、『自然学』第2巻テキスト26において人間の魂について言及しているところでは、それは多数化していると言っている。実際、次のように言うまでにいたっている。「実際、各々のものに対するその原因によって、また質料において離在的な種であるものに関して、例えば人間は人間を質料から生み出すのであり、太陽もそうである」⁶⁵。だから明白なことには、彼は魂が一つだけではなくて多数あると措定していた。

(59) この連結については別のこともある。というのも、誰もそうした者として見受けられていないし、またアリストテレスが何も言っていないからである。以上のように私には思われる。というのも、それ自体で虚構であることはアリストテレスと反対でもあるからである⁶⁶。

石田隆太（慶應義塾大学文学部訪問研究員）

高石憲明（筑波大学大学院人文社会科学研究科哲学・思想専攻教務補佐員）

⁶⁵ アリストテレス、『自然学』、第2巻第2章 194b11-15（内山訳、81-82）。

⁶⁶ 本稿はJSPS 科研費 18K12191 の助成を受けたものである。

A Translation of Pietro Pomponazzi's *De immortalitate animae* (up to Chapter 4)

Ryuta ISHIDA
Noriaki TAKAISHI

This is a partial Japanese translation of Pietro Pomponazzi's *On the Immortality of the Soul* (*De immortalitate animae*). It is part of our project wherein we intend to provide a complete translation of Pomponazzi's *De immortalitate* and in parallel we are working on the translation of Thomas Aquinas's *Sententia libri de anima*. This translation is also a necessary step for examining in detail the historical development of Aristotelian psychology.

After a dedication to his patron and a prologue, Pomponazzi begins with the proposition that a human being is of a manifold and ambiguous nature and occupies an intermediary position between mortal and immortal things (Chapter 1). Next, he lists six possible answers to the question in what sense the mortality and immortality can be attributed to the human soul (Chapter 2). Then, he discusses the first of the six ones, according to which there is only one immortal soul common to all human beings, and also an individual soul for each person, which is mortal. This view is attributed to Themistius and Averroes (Chapter 3).

In the next chapter (Chapter 4), Pomponazzi rejects this view (mainly attributed to Averroes) at great length. First of all, according to him, the Averroistic view is not only false but also alien to Aristotle. For the falsity, he only refers to the writings of St. Thomas Aquinas. In the following, he argues about the point that the Averroistic view is alien to Aristotle. There are three main refutations by Pomponazzi. First, he shows that the intellect has no operation that is completely independent of the body. Second, he maintains that in order to have an intellectual cognition, one must speculate the phantasma. He also points out that not only Averroes but also Thomas Aquinas is far from the truth in that Thomas maintains that human intelligence is truly immortal. Third, he refutes another Averroistic view that human happiness is a combination of active and possible intellect. The last thing to note is that the parts of Chapters 3 and 4 are translated into Japanese for the first time.